坂越（千種川流域）地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	視点 No.	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
1	銅鐸鋳型片	◎			20					●	●	有年考古館の館長であった松岡秀夫は、昭和51(1976)年、上高野の地蔵堂に祀られている石製品が弥生時代の銅鐸石製鋳型片であることを発見した。砂岩製で高さ24cm、重さ23.2kgを測る。製品は発見されていないが、推定される銅鐸の全長は80cmに達し、弥生時代中期の銅鐸としては全国最大のものである。現在は赤穂市立歴史博物館に収蔵されている。県指定。
2	六道絵	◎			21					●		誓教寺に所蔵されている16幅からなる作品で、その制作年代は18世紀後半から19世紀中頃と考えられる。六道絵は恵心僧都源信の『往生要集』によって広まった、極楽や地獄といった世界の具体的なイメージを表したもので、鬼たちによる人々への拷問などの地獄の様子を実際に絵にしている。誓教寺では4月最終日曜日に「御絵解法要」が行われている。市指定。
3	尼子塚(采女塚)	●			20 32		●			●		尼子義久とも赤松一族の富田采女の塚とも伝えられている。五輪塔の火輪・水輪・地輪を積み上げたもので、元は数基の五輪塔があったと考えられる。
4	高野石地蔵	●			21		●			●		高野字高取に石仏が祀られている。地元の伝承によると、この石仏はもと高取峠にあったが、武士の試し切りによって頭部は上高野へ飛び、下半部は峠の坂を転げ落ちてここにとどまったので祀ってあるとのこと。花崗岩製で高さ51cm、幅37cm、上端の欠損部で34cmある。像は胴部以下が残っていてその高さは32cm、蓮華座は幅28.5cm、高さ11cm。向かって左に「十月三日」と刻まれている。向かって右側に紀年銘があったと思われるが欠損のため不明。室町期の紀年銘石仏と推測される。なお、石の磨滅は坂を転がってきたものではなく、おそらく川の上流から流れてきた結果と推測される。
5	高野地蔵尊	●			21		●			●		高野共同墓地内にある迎え仏。元文3(1738)年に造立された像高105cmの丸彫り立像。奉納者は大坂天満や堂島の在住者で、田端の高取峠地蔵と一部に同一人物の名が見られる。
6	地蔵(上高野)	●			21		●			●		上高野集会所敷地内の堂宇に安置された像高50cmの丸彫り坐像で、かつて地蔵として祀っていた石仏が、松岡秀夫氏によって弥生時代の銅鐸鋳型片であることが判明し、歴史博物館に収蔵されたため、昭和58(1983)年の千種川堤防修復後の地蔵堂新築とともに新たに造立されたもの。平成10(1998)年現在地に移転。
7	高取峠地蔵	●			21		●			●		現在は田端集会所敷地内にあるが、かつては高取峠の街道沿いにあった。元文4(1739)年に造立された丸彫りの立像。平成15(2003)年に現在地に移転。「田端地蔵尊」とも呼ばれる。奉納者は大坂天満や堂島の在住者で、田端の高野地蔵尊と一部に同一人物の名が見られる。
8	地蔵(春日)	●			21		●			●		赤穂自動車教習所東にある、像高76cmの丸彫りの石造坐像。
9	づれの地蔵さん	●			21		●			●		野中橋東詰めにある、文政12(1829)年造立の石造半跏像。かつては千種川左岸の赤穂市斎場北に安置されていたが、県道周世尾崎線の道路拡張工事に伴い現在地に移転した。平成9(1997)年に地蔵堂新築。
10	赤穂市斎場の石仏群	●			21		●			●		赤穂市斎場敷地内には、市内各地から移された六地蔵が計222体、地蔵菩薩像が7体安置されている。
11	中井君玄端甫之墓碑	●								●		興福寺境内にある。井上養山の子として正保2(1645)年に広島で生まれた中井昌直は、中井竹庵の養子となり、父とともに龍野藩主脇坂候に仕えたが、宝永3(1706)年官を辞して大坂に移り住む。享保元(1716)年、赤穂に移り医院を開業する。字を玄端と号した。墓碑は享保5(1720)年建立。
12	藤田乏悠君墓碑	●								●		興福寺境内にある。藤田宗短は、字を乏悠という。宝永4(1707)年に病で死去し、総州關宿邑(千葉県関市)にて葬られる。墓碑は宝暦6(1756)年に建立し、仏経を一巻埋めたという。
13	東閣先生墓碑	●								●		興福寺境内にある。藤田東閣は赤穂森藩の医官であり、名を温信といった。字は恵淑、東閣はその号である。墓碑は明和6(1769)年に建立。
14	久保江雲墓碑	●								●		興福寺境内にある。姫路の生田先生に師事し、煮塩の業、医学を遂げた。寛保3(1743)年に大疫、翌年の延享元(1744)年に卒。墓碑は安永2(1773)年に建立、赤松滄州撰。
15	河野魯斎墓碑	●								●		興福寺境内にある。宝暦9(1759)年生まれ、赤松滄州の次男である。河野氏の養子となり、城郭、溝池の制から機械用兵に精通した漢学者。名を通綸、字は大経、通称は二郎平、魯斎と号した。天明6(1876)年没。墓碑は同年建立。
16	滄州先生墓碑	●								●		興福寺境内にある。赤松滄州は享保6(1721)年生まれの漢学者。赤穂藩医、大川耕斎の養子。名を鴻、字を国鸞、通称を良平、滄州と号した。寛政13(1801)年没。墓碑は享和元(1801)年に建立。
17	柳田廣川先生墓碑	●								●		興福寺境内にある。柳田武佐衛門は、明和6年(1769)年に三代武佐衛門の子として生まれ、領内にて講釈、教示を行った。墓碑は文政元(1818)年に建立。
18	文水逸菴墓碑	●								●		興福寺境内にある。藩医、藩公より号逸菴を賜る。明治26(1893)年に59歳で没。文水妣延原艶子(妙逸)大正5(1916)年没。墓碑は大正6(1917)年に建立。田淵淳蔵謹表。
19	斎月淳蔵先生墓碑	●								●		興福寺境内にある。田淵斎月は文水先生の長子。東京大学で医学を学び帰郷後、尾崎、新浜、那波町の村医、小学校医、兵庫県知事の金碑、赤穂町長の銀盃を戴く。大正9(1920)年に56歳で死去。墓碑は同年建立。延原幹三謹識。
20	幹三延原先生夫婦の墓碑	●								●		興福寺境内にある。田淵逸菴の第3子。延原氏を嗣ぎ、東京斎生学舎の開業医試験に合格、米国クーパー大学の医学博士の学位取得。赤穂郡医師会長学校医会長。昭和15(1940)年に64歳で病没。墓碑は昭和17(1942)年に建立。花岳伯仙撰書
21	貢斎先生久保一學墓碑	●								●		興福寺境内にある。内海藤太夫(常信)の次子で久保氏を嗣ぎ、柳田氏に子なく再娶、尾崎村を嗣ぐ。享和元(1801)年に52歳で病没。墓碑の建立年月日不明。久保為益謹誌。
22	友蘭田淵先生墓碑	●								●		興福寺境内にある。田淵医院、父淳節の第4子。寛政8(1796)年生まれ、嘉永3(1850)年に55歳で病没。建立年月日不明。
23	御大典記念碑	●								●		北野中天満宮境内にある。昭和3(1928)年建立。
24	亀ノ甲旧石記念碑	●			32	●	●			●		春日神社境内にある。亀の甲井堰は赤穂藩森家時代にかさ上げ修理され、明治28(1895)年の千種川改修の時撤去された。築造のため石材を亀の甲より採掘すると、中世にも稀な一つの奇石があり、基盤の如く斑点がありこれを基盤石と名付けた。保存会を作り、大正13(1924)年に春日神社境内に記念碑を建立したことを記す石碑。
25	基盤石(亀ノ甲旧石)	●			32	●	●	●		●		春日神社境内にある。大正13(1924)年建立。亀の甲井堰より採掘された基盤石。従三位子爵源忠怒書。
26	蔵民露影碑 (大本重太郎)	●								●		長楽寺境内にある。赤穂郡(上郡町)高田村に明治3(1870)年に生まれる。小学校訓導、高雄、赤松、岩木の各学校の校長、砂子区長となり村道改修などに尽力した。墓碑は昭和8(1933)年建立。
27	山崎寅三郎先生之墓碑	●								●		長楽寺境内にある。明治11(1878)年砂子生まれ。茶・華道師範。南山、茶道久田流師範代として狐峰庵宗延と、また華道本法未生流第二世として叡昌斎南甫と号す。息継ぎ井戸側に狐峰庵を構え、茶花を子女に教えた。墓碑は昭和25(1950)年建立。
28	杏屋仙吉墓	●								●		高野田端集落内にある、「勝負師」と呼ばれた杏屋仙吉の墓。明治12(1879)年建立。
29	上高野遺跡		●		34						●	上高野銅鐸鋳型片が見つかった周辺にあたるが、現在のところ集落跡は発見されていない。
30	高取山古墳群		●		20 34						●	21基の横穴式石室墳が発見されている。現在のところ出土遺物はそれほど多くないが、6世紀末～7世紀前半頃に築造されたものが多いとみられる。
31	高取山積石塚古墳群		●		34						●	高野・田端集落の裏山、高取山の南東斜面の山裾から中腹にかけて分布し、横穴式石室墳の間に交じって積石塚古墳が点々と6基発見されている。径はいずれも10m以下であるが、積石が崩れており円墳であるかは明らかでない。石室は箱式石棺というより竪穴式石室の性格をもつ。
32	八重山古墳		●		34						●	高取峠の頂上から旧道を西へ入った高野字八重山の斜面にある。古墳は封土の流出等によって消滅。
33	高伏山古墳群		●		20 34						●	高取山の南側の最高峰、標高280mの高伏山山頂から西方へ尾根伝いに200mばかり行ったあたりに3基散在している。いずれも崩壊・盗掘をうけている。このような高所に墳墓を構築していることから、山頂付近に生活基盤があったか、農業地帯の田端と海岸地帯の児島との中間にあり、両地帯と交流する集団であったのではないかと推測される。
34	南野中中洲遺跡		●		20 34						●	坂越橋から1.6kmほど下流に南野中地区に属する中洲がある。渇水時にはかなり大きな中州となり、千種川西岸に接するほどであるが、増水時には水没。昭和51(1976)年、この中州で砂利採取作業がおこなわれた時、多数の土器が出土。
35	南野中川岸遺跡		●		20 34						●	昭和51(1976)年の台風17号に伴う千種川大洪水による河川改修がおこなわれた際、赤穂大橋の上流700mの西岸において土砂に交じって数点の土器が採集された。
36	高野遺跡		●		20 34						●	千種川東岸の比較的広大な平野にある。未調査ながら土器が採集されている。
37	浜市遺跡		●		20 34						●	民間開発によって発見された遺跡で、弥生時代中期の集落跡のほか、古代、中世の掘立柱建物跡が発見された。
38	上高野銅鐸鋳型発見地		●		20 34						●	昭和51(1976)年、地域住民が祀っていた石仏が弥生時代の銅鐸鋳型片であることが判明した際、聞き取り調査によって発見地が推定された場所。
39	尼子山城跡		●		20 29 32 34		●				●	標高259mの山頂部にあり、尼子将監義久により築かれたという。山頂は平坦で中央部がややくぼれ、4段からなる曲輪が残り、井戸跡もある。永禄6(1563)年義久落城説もあるが、義久は出雲富田城落城後、出家して慶長15(1610)年まで生きているので、一族が在城したとも考えられている。
40	荒神社(上浜市)		●		21 33		●			●		西山寺に隣接してある。祭神は火魂神。
41	荒神社(浜市)		●		21 33		●			●		集落を見渡す山麓にあり、南向きの社殿が建っている。開拓の神でもある火魂神を祀る。境内には稲荷社のほか道祖神・縁結びの神も祀る。

坂越（千種川流域）地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	視点 No.	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
42	荒神社(砂子)		●		21		●			●		祭神は火魂神である。かつては現在地より100m東の山麓にあったが、大正末期か昭和の初めに移築されたという。この場所は砂子御山と呼ばれ、参道には大間・小間も建てられていた。境内には塞の神を祀る。
43	天満宮(北野中)		●		21 33		●			●		祭神は菅原道真である。境内には春日神社や荒神社を合祀する。かって春日神社は後山、荒神社は宇新田に祀られていた。安政2(1855)年銘の手洗石がある。
44	春日神社(南野中)		●		21 33		●			●		祭神は天児屋根命で、南野中の鎮守の神として祀られている。境内には水神社と金毘羅社がある。金毘羅社はかつては亀の甲井堰の堤防上にあったものを合祀したものである。
45	尼子神社		●		20 21 33		●			●		祭神は尼子将監義久で、尼子山上にも祀られている。境内には三宝荒神社、ニイガキ社などがある。ニイガキ社は義久と運命をともにした側室ニイガキの君の霊を慰めるために建立されたという。山上の鳥居は安永3(1774)年、境内の手洗石は文政5(1822)年の紀年銘がある。
46	愛宕神社跡		●		21		●			●		浅野長直は、正保2(1645)年に赤穂に入封し、翌年正月24日近藤正純に命じて城の鎮守として愛宕山社を建立させた。この地は城の丑寅(北東)にあたり鬼門となるため、厄除けと武運繁栄・国家安全を祈って社を建立したといわれている。現在、社殿は朽ち果て玉垣と鳥居を残すのみである。
47	光蓮寺		●		21		●			●		浄土真宗本願寺派の寺院。本尊は阿弥陀如来。創建は大栄3(1523)年、開祖は僧宗玄、寛文元(1661)年に寺号紫雲山となっている。
48	正覚寺		●		21		●			●		浄土真宗本願寺派に属し、本尊は阿弥陀如来。僧覚阿により正中2(1325)年に開基される。寛文元(1661)年に本願寺第九世実如上人から寺号を授かる。山号は宝林山。明治37(1904)年に火災、明治43(1910)年に再建。
49	真覚寺		●		21		●			●		浄土真宗本願寺派の寺院で、本尊は阿弥陀如来である。寺伝によれば、永正5(1508)年に僧善入によって開基されたと伝えられている。山号は金剛山。
50	興福寺		●		21 32		●			●		臨済宗妙心寺派の寺院で、本堂に聖観世音菩薩像、開山堂には盤珪国師木像を安置している。平安末期頃に創建され、藤原氏と関係が深いと伝えられるが明らかではない。盤珪は慶安3(1650)年北野中に庵を設け、寺を中興し、弟子は5万人余りを数え、播磨一円のみならずに全国に47寺を開創したともいう。山号は春日山。境内には赤穂藩家老森家、柴原家、柳田家の累代墓をはじめ赤松滄州、中井玄端、藤田東閣、柳田美郷等の文人の墓があるほか、文政元(1818)年造立の地蔵菩薩像、板碑形後背をもつ半肉彫り阿弥陀如来像がある。播州赤穂坂内33カ所と播州赤穂郡33観音霊場の12番札所である。
51	専光寺		●		21		●			●		浄土真宗大谷派に属し、阿弥陀如来を本尊とする。寛永6(1629)年開基。創建時は西本願寺に属していたが、浅野時代に東本願寺の布教所となり、浅野赤穂藩主より大谷派に転派を命ぜられ現在に至る。山号は亀甲山。
52	誓教寺		●		21		●			●		浄土真宗本願寺派の寺院。本尊は阿弥陀如来。元文3(1738)年に僧無能の開基。山号は三光山。寺宝の三界六道図絵は16幅、色彩も鮮やかで保存状態も極めて良く、江戸末期頃の作と推察されている。かつては隔年で5月上旬に「御絵解法要」が行われ、赤穂周辺から多くの参詣者があり賑わった。現在は4月最終日曜日に「御絵解法要」が行われている。
53	西山寺		●		21 34		●			●		行基菩薩が開山、観照上人が中興と伝わる。尼子氏の所願寺となるが焼失し、元禄中頃に再建。享保年間に焼失、元文3(1738)年再建、現在に至るという。山号は宝壽山。参道には像高112cmを測る丸彫りの半跏像がある。
54	長楽寺		●		21 32 34		●			●		聖武天皇の神亀年間勅令を奉じて布教遊説し、神亀元(724)年に建立と伝わる。山号は宝性山。寺院として塩田を有したのはここのみという。
55	慈光寺跡		●		21		●			●		赤穂藩主浅野長直が、赤穂城築城工事成功を祈願して正保2(1645)年に建立した。開山は秀恕。願主は近藤正純。真言宗遠林寺末寺。山号は愛宕山。
56	三木家住宅		●				●					近代和風建築。
57	近藤三郎左衛門正純宅跡		●				●					近藤正純は浅野家の軍学師範、家老。慶安元(1648)年から寛文元(1661)年に及ぶ赤穂城築城の縄張りを行う。築城後は城内に屋敷を構えた。
58	亀甲跡		●		27	●		●				江戸時代には、熊見川の水を堰き止めて城下町側に川を流し、舟運の便を図った。また、石堤は道の役目を兼ねた。
59	盤珪和尚座禅岩		●		21		●			●		盤珪永琢は、元和8(1622)年、揖西郡網干浜田村(現在の姫路市)に生まれる。幼いころから仏門に入り、寛永15(1638)年に赤穂城下の随鴎寺の雲甫全祥のもとで得度。盤珪は慶安3(1650)年に北野中に一庵(現在の興福寺)を設け、雲甫の教えである座禅の難行修業を重ね、不生を説いた。興福寺の裏山の険しい山道を登ると中腹あたりに盤珪が座禅修業したと伝わる岩がある。
60	万歳所		●							●		出征する兵士、伊勢詣などで旅立つ人を身よりの者や近所の人々が見送り、別れを惜しんだところで、時には万歳三唱をしたという。当時の風習で、今はその面影はない。
61	尼子山の大岩		●		20		●			●		尼子山山頂にある大岩。眺望が良い。
62	高取峠		●		27 32 35		●		●			高野田端から相生方面に向かう峠で、赤穂市と相生市の境界に位置する。刃傷事件を伝える早かごが通った道として「早かごモニュメント」が設置されているが、昔のルートと現在のルートは違っている。昔話「二人の旦那はん」の舞台にもなっている。(赤穂の昔話)
63	砂子停車場跡		●		27 30		●	●				赤穂鉄道の播州赤穂駅から2.5km北にある停車場で、乗客がある場合のみ列車が停車していた。駅舎は待合所のみの簡便な建物であった。また、裏山には保線用の土取場があった。
64	赤穂鉄道坂越駅跡		●		27 30		●	●				赤穂鉄道坂越駅は浜市にあり砂子駅間0.8km、目坂駅間1.8kmであった。駅には本家(事務所・待合所・社宅)と便所があった。また、駅前から坂越港行きの赤鉄バスが発着した。
65	JR赤穂線		●		27		●					昭和26(1961)年に播州赤穂－相生間に赤穂線が開通した際に設置された、赤穂の玄関口。当時は市街地北側の田園地帯に位置していたが、現在は市街地に取り込まれている。
66	JR坂越駅		●		27		●					昭和26(1951)年に播州赤穂－相生間に赤穂線が開通した際に設置された、坂越の玄関口。
67	大崎資料館		●		21		●					江戸時代より代々瓦師を務める大崎氏が、私設で開設した瓦の資料館。
68	誓教寺絵説き			●	21					●		寺宝の三界六道図絵は16幅。色彩も鮮やかで保存状態も極めて良く、江戸末期頃の作と推察されている。かつては隔年で5月上旬に「御絵解法要」が行われ、赤穂周辺から多くの参詣者があり賑わった。凄惨な描写により、見る人々へ地獄の恐怖心を強く焼きつけ、この世における善行を説く仏の教えを実現させている。
69	尼子山の雨乞い			●	20					●		尼子山は一名『雨乞い山』ともいい、干ばつの年は雨乞いをした山ともいう。
70	導水路と加里屋川の景観			●	28	●	●					浜市から山崎山麓までは、山側に上水道の導水路があり、平野側に加里屋川が流れており、旧赤穂上水道の導水路景観がよく残されている。周辺は赤穂鉄道軌道跡の桜並木などもあり、景観に優れている。
71	浜市			●	32 36		●					地名。上流の木津が材木の積出港で、その下流の浜に市がたったと推定される。